

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 高良倉吉</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ (豊年祭)</p> <p>キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Prefecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest)</p> <p>作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027</a>

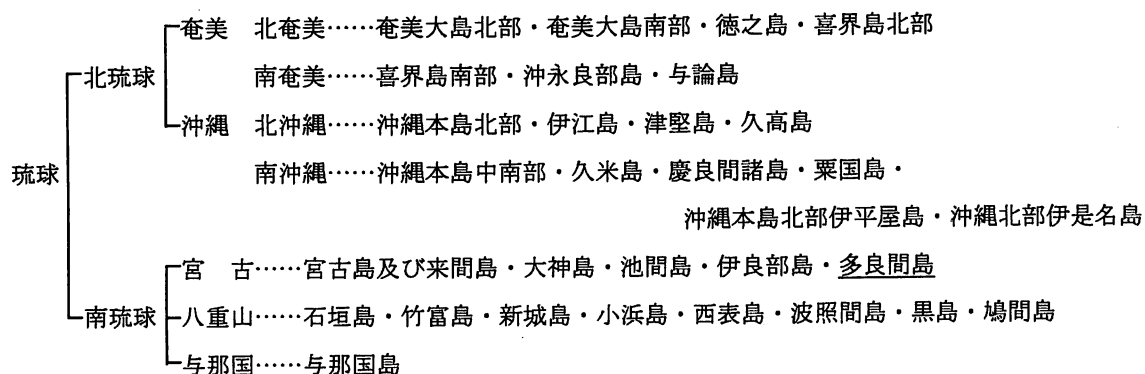
## 多良間方言の系譜

—多良間方言を歴史方言学的観点からみる—

かりまたしげひさ\*

### 1. これまでの多良間方言の位置づけ

多良間方言（多良間村塩川、仲筋、水納の3集落の方言の総称）は、ほとんどの研究者によって宮古諸方言の下位方言として位置づけられてきた。ふるくは與儀達敏1934「宮古島方言研究」、最近では上村幸雄1992「琉球列島の言語（総説）」でも、多良間方言は宮古方言の下位方言のひとつとして区分されている。中本正智1984「琉球方言の区画」でも多良間方言はつぎのように宮古方言の下位方言のひとつに区分されている。



しかし、ほとんどの研究者がどういう基準をたてて、多良間方言を宮古諸方言の下位方言に区分するのか明示していない。たしかに、これまでの調査で宮古諸方言と多良間方言に共通にみられる現象も存在するが、多良間方言には宮古諸方言とはちがう現象がみられ、そのなかには八重山諸方言と共通するものがある。上村1992も多良間方言を宮古諸方言に下位区分しながら、多良間方言が「宮古本島から一番はなれて、八重山方言にもっとも距離的に近く、方言的にも、八重山方言と類似点」がみられるとのべている。上村1992のいう多良間方言の八重山諸方言に類似する特徴とはどんなものだろう。

多良間島は宮古島と石垣島の間より石垣島よりに位置する。石垣島は山がたかく、距離的にもすこし近いために多良間島からはっきりと見えるし、平久保半島からも多良間島は見える。宮古島は距離的にも遠いうえに島が平らで、宮古島からは見えない。多良間島からは天気がよくて水平線がはっきりしているとき、見えることがあるらしいが、石垣島

\* 狩俣 繁久 琉球大学法文学部助教授

の見え方とは比較にならない。この地理的な条件のちがいは方言に影響を与えていないだろうか。それとも、多良間の人びとが稲作のために石垣島にわたり、平久保半島の東岸で耕作したといわれる（そこを「多良間田」とよぶそうだ）が、それが方言に影響をあたえていないのだろうか。多良間は近世において八重山と宮古の海上交通の要衝であったが、そんな影響もあるのだろうか。多良間方言の八重山諸方言に類似する特徴は、いかなる理由から生じたのだろうか。

上村幸雄1990は、宮古諸方言と八重山諸方言のちがいをつぎのようにのべている。

この方言（八重山方言）も、宮古方言の / ɾ /、したがって、標準語の / i / に対応する舌先のな母音音素をもつ点で、宮古方言と共通し、北グループの諸方言と異なる。しかし、宮古方言のように、豊かな閉音節構造、音節主音の子音を発達させていない。そして、八重山方言の舌先のな母音は、宮古方言の / ɾ / が同方言の摩擦音の子音音素 / s / / z / と同一の調音位置、同様のせばめをもつてつくられ、調音的も子音的であるのに対して、八重山方言のそれは、子音とのわりに摩擦音 [s] [z] が挿入されることはあっても多くの方言で宮古方言のそれに比して、調音的にも母音である。

上村1992によれば、宮古方言と八重山方言は、(1)豊かな閉音節構造、(2)音節主音的な子音、(3)舌先母音の摩擦音のつよさを基準に区分することになる。

また、高橋俊三1999「八重山のアイデンティティーを求めて」では八重山諸方言と宮古諸方言のちがいをつぎのようにのべている。

八重山方言を宮古方言と比べると、①共通語の e に対応する母音が i になる傾向が強い。②「居る」の語頭の子音 b が脱落する方言がある。③動詞の終止形は「本土語の終止形 + ン」の形をもつ方言が多い。④形容詞の終止形は「語幹 + サ + 有り (+ ン)」に対応する方言が多い。⑤四箇の方言を中心にして、沖縄方言の影響を比較的多く受けているということなどが言える。

高橋1999の①②の基準は音韻論的な特徴に関するもので、③④は文法的な特徴に関するものである。⑤の沖縄方言の影響がいかなるものかのべられていないので、詳しくはわからない。

音韻、文法、語彙などの言語的な特徴によって方言を区分したものを「方言区画」という。その境界線は、海や山、川などの地理的な条件によってひかれることもあり、また、ふるい時代の政治的な区分、あるいは、社会的な条件によってひかれることもある。多良間方言を宮古八重山方言群のなかのいかに位置づけるべきか、発音（音韻）、文法、語彙の観点からみてみたい。

## 1. 発音（音韻）の観点から

### 1.1. 閉音節構造

閉音節構造とは音節を母音でおわらせないで、子音でおわらせるものをいう。標準語にも子音おわりの音節はみられる。標準語のばあい、音節を閉じる子音ははねる音（撥音）とつまる音（促音）にかぎられるが、宮古諸方言のばあい、つぎのように、音節を閉じる位置にくる子音には[m] [ŋ] [ɣ] [f] [ʃ]（伊良部島長浜・佐和田の方言にだけ[ɫ]）があって、閉音節構造の単語が多くみられる。

カむ k a m (神)、	カン k a ŋ (蟹)、	イむ i m (海)、	バヴ p a ɣ (蛇)	平良市下里方言
トゥる t u ɫ (鳥)、	パる p a ɫ (針)			伊良部町長浜方言

閉音節構造の単語は、たしかに多良間方言にも豊かにみられる。多良間方言のばあい、すり舌の側面摩擦音[ɫ]があって、この子音も閉音節をつくることができる。

カむ k a m (神)、	カン k a ŋ (蟹)、	イむ i m (海)、	パウ p a u (蛇)、	トゥる t u ɫ (鳥)、	パる p a ɫ (針)	多良間村仲筋方言
カン k a N (神)、	カン k a N (蟹)、	イン i N (海)、	ポー p o : (蛇)、	トゥイ t u i (鳥)、	パイ p a i (針)	水納島方言

ところが、平良市西原（池間島からの移住集落）方言は、標準語のようにつまる音、はねる音をもつものの、他の宮古諸方言のような閉音節構造を発達させていない。はじめから存在しなかったというよりは後に退化させたと考えられる。西原方言の母体となった池間島方言も閉音節構造をたもっているが、やはり退化させつつあるようだ。

カン k a N (神)、	カン k a N (蟹)、	イン i N (海)、	トゥイ t u i (鳥)、	ハイ h a i (針)
------------------	------------------	----------------	-------------------	-----------------

八重山諸方言は、標準語のようなはねる音、つまる音をもつものの、上村幸雄1992がいうように、宮古諸方言のような閉音節構造をゆたかに発達させていない。八重山諸方言も池間島方言と同様に退化させた可能性がある。宮古諸方言が閉音節構造を発達させ、八重山諸方言がそうでない傾向があるとしても、宮古諸方言と八重山諸方言を明確に区分するための決定的な指標にはなりえない。

## 1.2. 音節主音的な母音と舌先母音

音節主音的な母音 (syllabic consonant) とは、調音 (発音の方法) 的には子音のようなせばめをつくるが、機能的には音節主音になって子音と結合して母音のようにふるまう子音をいう。簡単にいうと、母音のように機能する子音である。子音のように機能する母音を半母音 (/j/ /w/) というのに対して、半子音 (semi-consonant) ということがある。宮古諸方言のばあい、この半子音とでもよぶべきものが発達している。

プ <sup>ハ</sup> : b <sup>イ</sup> : b <sup>イ</sup> : g a s s a (くわずいも)  
 ク <sup>ハ</sup> : f <sup>イ</sup> : f i (作れ)  
 む <sup>ツク</sup> t t a (道は)、 <sup>フツダ</sup> f d d a (鯨)

伊良部町佐和田方言  
 平良市大神島方言  
 城辺町保良方言

標準語のせま母音 / i / に対応してあらわれる宮古諸方言の舌先母音 / ɿ / (これまで  
 おおくの研究者によって中舌母音 / i / と誤認されてきた) は、「同方言の摩擦音の子音音  
 素 / s / / z / と同一の調音位置、同様のせばめをもってつくられ、調音的にも子音的で  
 ある」。舌先母音 / ɿ / の発音の方法は、摩擦音 [s] [z] とおなじなのである。この母  
 音を [ɿ̥] [ɿ̥̥] と表記してきたのは、この摩擦音的な特徴をとらえたからである。摩擦音  
 [s] [z] が音節主音になって子音 [p] [b] [k] [g] と結合し、母音として機能し  
 たものが舌先母音 / ɿ / であると言いなおすことが可能である。この現象をネフスキーは  
 [psara] 平良、[pstu] 人と表記したりした。

そして、八重山諸方言の舌先母音 / ɿ / は宮古諸方言のそれに比べると、たしかに摩擦  
 がよわく、子音的な調音をしない。石垣方言や竹富島方言、鳩間島方言などでは舌先母音  
 そのものを退化させて、前舌せま母音 / i / に変化させている。しかし、新城島方言は舌  
 先母音の摩擦がつよく、宮古諸方言のそれにかかなり近い。それゆえ、方言を耳にした印象  
 がかなり似ている。新城島の人は宮古の人にまちがえられ、宮古の人を新城島の人とまち  
 がえるそうだ。

一方で、宮古諸方言のなかの池間島方言は、舌先母音 / ɿ / の摩擦がよわくなって前舌  
 せま母音 / i / に変化しているし、大神島方言もまだ全体的な現象にはなっていないが、  
 舌先母音の摩擦はよわくなってきている。

	人	肝	魚
平良市下里	ピ <sup>ハ</sup> トウ p <sup>ɿ̥</sup> t u	キ <sup>ハ</sup> ム k <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ズク</sup> i z u
平良市大神	ピ <sup>ハ</sup> トウ p <sup>ɿ̥</sup> t u	キ <sup>ハ</sup> ム k <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ウ</sup> i u
平良市池間	ヒ <sup>トク</sup> トウ h i t u	ツ <sup>ム</sup> ts <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ズク</sup> i z u
多良間村仲筋	ピ <sup>ハ</sup> トウ p <sup>ɿ̥</sup> t u	キ <sup>ハ</sup> ム k <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ズク</sup> i z u
多良間村水納	ピ <sup>トク</sup> トウ p i t u	キ <sup>ム</sup> k i m u	イ <sup>ジュ</sup> i ʒ u
石垣市石垣	ピ <sup>トク</sup> トウ p i t u	キ <sup>ハ</sup> ム k <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ズク</sup> i z u
竹富町新城	ピ <sup>ハ</sup> トウ p <sup>ɿ̥</sup> t u	キ <sup>ハ</sup> ム k <sup>ɿ̥</sup> m u	イ <sup>ズク</sup> i z u

発音の観点からみると、たしかに、多良間方言は宮古諸方言に近い印象をうける。しか  
 し、これまでみてきたように、発音上の特徴は多良間方言を宮古諸方言の下位方言として  
 明確に区分することはできない。上村1992の示した、宮古諸方言と八重山諸方言のあいだ  
 にみられるちがいは、両方言のあいだの傾向性みtainなものをとらえてはいるとしても、

明確な基準とはなりえないことが理解できたものとおもう。

## 2. 文法の観点から

宮古諸方言、および八重山諸方言の文法に関する詳細な研究がまだ不十分な段階で結論づけるのは性急かもしれないが、文法的な特徴について検討してみたい。

### 2.1. 形容詞のばあい

宮古諸方言の形容詞は連用形「高く」に「有り」が融合しているのに対して、八重山諸方言、与那国方言の形容詞は「高さ」に「有り」に相当する形が融合していて、沖縄方言と同じ系統の活用体系をもっている。与那国方言の形容詞は複雑に変化していて、わかりにくくなっているが、八重山諸方言と同様に「高さ+有り」であろう。そして、高橋1999や、津波古敏子1983「多良間島の方言」がいうように、多良間方言の形容詞は、明らかに八重山諸方言の系列に属する。形容詞の言い切りはタカシャーる [t a k a ʃ a : 1] (高い) のように-ʃ a : 1, 沖縄・八重山方言と同じくサアリ>系統の語形である。

	強い	高い	甘い
平良市下里	ツゥーカイ tsu : k a 1	タカカイ t a k a k a 1	アカマイ a m a k a 1
平良市池間	チューカイ tʃu : k a i	タカカイ t a k a k a i	アズマカイ a d z 1 m a k a i
城辺町保良	ツゥーカイ tsu : k a 1	タカカイ t a k a k a 1	アズマカイ a d z 1 m a k a 1
多良間村塩川	チューシャーる tʃu : ʃ a : ʃ	タカシャーる t a k a ʃ a : ʃ	アズマシャーる a d z 1 m a ʃ a ʃ
石垣市石垣	ツゥーサーン tsu : s a : N	タカサーン t a k a s a : N	アマサーン a m a s a : N
竹富町小浜	ツゥーハーン tsu : h a : N	タカハーン t a k a h a : N	マーハーン m a : h a : N
竹富町黒島	スゥーサン s u : s a N	タカハン t a k a h a N	アマハン a m a h a N
竹富町波照間	スゥーサーハン s u : s a : h a N	タカハン t a k a h a N	アマハーン a m a h a : N
与那国町祖納	スゥサン s u s a N	タガン t a g a N	アマン a m a N

その点では中本正智1976でもつぎのようにのべていて、多良間方言の八重山諸方言との共通のものであるとしている。中本1976のいう「八重山属領時代」の「影響」とはどのようなことなのか、中本1976が何を根拠にそうのべているのか、それ以上の記述がみあたらないので、詳細は不明であるが、多良間方言の基層が八重山方言と共通するものであるとみていたのであろう。

此のʃ a : ʃはサアリ系に属するもので、多良間方言の特色となっている。宮古方言の中ではサアリ系の終止形語尾をもっているのはこの多良間方言と水納方言だけであり、他の宮古方言はすべて t a k a k a i (高い) のようなクアリ系を用いている。多良間方言のこのサアリ系は「八重山属領

時代」の八重山方言の影響であるとも考えられる。

## 2.2. 名詞の曲用

名詞に助詞がくつつくとき、形をかえること（名詞の語形変化）を曲用という。宮古諸方言は、名詞に接続する格助辞—j u（標準語の「を」に相当）と、とりたて助辞—j a（標準語「は」に相当）は、名詞の末尾のフォネームのちがいに応じて特徴的な融合のしかたをする。末尾になが母音があられる名詞に接続するとき（下の表の①）には本来の形—j u、—j aがあられるが、みじか母音/i/に接続するとき（②）には末尾の音節と融合し、口蓋音化した音節（拗音節）があられる。末尾のみじか母音/a/に格助辞—j uが接続するとき（③）にはなが母音/o:/になり、とりたて助辞—j aが接続するときにはなが母音/a:/になる。みじか母音/u/に格助辞—j uが接続するとき（④）にはなが母音/u:/になり、とりたて助辞—j aが接続するときには、なが母音/o:/になる。舌先母音/ɾ/に接続するとき（⑤⑥⑦）には半母音/j/が摩擦音/z//s/に変化する。

	はだか格	格助辞—j u	とりたて助辞	
①目	ミー mi :	ミーユ mi : j u	ミーヤ mi : j a	
②豆	マミ mami	マミユ mamju :	マミヤ mamja :	
③花	パナ pana	パノー pano :	パナー pana :	
④婿	ムク muku	ムク muku :	ムコー muko :	
⑤鳥	トゥイ tuɪ	トゥイズウ tuɪz u	トゥイザ tuɪz a	
⑥先	サキオ sakɪ	サキオ スク sakɪ s u	サキオ サ sakɪ s a	
⑦釘	フギオ fgɪ	フギオ ズク fgɪ z u	フギオ ザ fgɪ z a	平良市下里方言

それに対して、多良間島方言においては、舌先母音/ɾ/と融合して石垣方言のように前舌半せま母音/ɛ:/があられる。

	先	先は
平良市下里	サキオ sakɪ	サキオ さ sakɪ <sup>s</sup> s a
城辺町保良	サツ satsɪ	サツサ satsɪ <sup>s</sup> s a
多良間村仲筋	サキイ sakɪ	サけー sakɛ :
石垣市石垣	サキイ sakɪ	サけー sakɛ :
竹富町波照間	サキイ sakɪ	サけー sakɛ :

また、前舌せま母音/i/が末尾にくる名詞のばあいも、前舌半せま母音/e:/があられ、宮古諸方言とはことなり、八重山諸方言とおなじである。

	豆	豆は
平良市下里	マミ mami	マミヤー mamja :
城辺町保良	マミ mami	マミヤー mamja :
多良間村仲筋	マミ mami	マメー mame :
石垣市石垣	マミ mami	マメー mame :
竹富町波照間	マミ mami	マメー mame :

多良間方言の「居る」の尊敬語は〔wa : ʔ〕で、この動詞は補助動詞としても使用されて〔numiwa : ʔ〕「お飲みになる」という形の要素になる。この〔wa : ʔ〕は石垣方言の尊敬動詞〔o : ruN〕とともに、『おもろさうし』の尊敬動詞「おわる」にさかのぼるものである。それに対して、宮古諸方言の「居る」の尊敬語は〔urama 1〕で、尊敬動詞をつくる補助動詞は〔-ma 1 / sama 1〕である。あきらかに多良間方言や石垣方言などの尊敬動詞とはことなっている。

このように、文法的な観点からみると、多良間方言は八重山諸方言と共通の要素をおおくもっているように見受けられる。一般に文法的な特徴は急激な変化をおこさないといわれている。多良間方言が八重山方言と共通するこれらの文法的な特徴も保守的で、ふるいものであろう。

### 3. 「顔」は宮古 — 語彙の観点から —

語彙的にも、つぎの「砂糖黍」「虹」「蜻蛉」などの語形にみるように、多良間方言の語形は八重山方言とおなじ系列の語形がみられる。この分布のしかたは、文法のばあいの分布に似ている。宮古対八重山という対立のなかで、多良間方言が八重山諸方言側に属することを示している。

	砂糖黍	虹	蜻蛉 (とんぼ)
平良市下里	ブーギョ bu : gʷ	ティムバグ timpay	ビーい bi : 1
平良市池間	ブーズ bu : dz 1	ティムバグ timpay	ビー bi :
城辺町保良	ブーズ bu : dz 1	ティムバグ timpav	ビーい bi : 1
多良間村塩川	スツツア sʔttsa	ヌヅ nudz 1	アケーズ ake : dz 1
多良間村仲筋	スツツア sʔttsa	ヌヅ nudz 1	アケーズ ake : dz 1
多良間村水納	スツツア sʔttsa	ヌヅ nudz 1	ケーズ ke : dz 1
石垣市石垣	スツツア sʔttsa	モーギイ mogii	カケズ kakedz 1
竹富町竹富	シラ ʃira	オーナーズ onaz 1	アーケーツ ake : tts 1
竹富町黒島	シンザ ʃindza	ムージ mu : dz i	ハケーズ hakedz 1



竹富町小浜	シンジャ ʃ i n d ʒ a	モーキイ m o : k i	アケーンツ a k e : n t s 1
竹富町波照間	アマスナ a m a s ɳ ŋ a	ヌーズン n u : d z i N	アヤズ a j a d z 1
与那国町祖納	アマダ a m a d a	アミヌミヤ a m i n u m j a :	アギダン a g i d a N

しかし、つぎのように「顔」の分布にみられるように、多良間方言が宮古諸方言と共通の語形であられるばあいもある。「甘薯(サツマイモ)」「蓬」のように、一見すると多良間方言が宮古諸方言と共通で、八重山諸方言とことなる語形であられているかのような語形もある。「蓬」についてみてみると、宮古諸方言の語形は「灸草(やいとぐさ)」に対応するもので、八重山諸方言の語形は沖縄方言の「フーチバー」系の語形である。宮古諸方言の〔j a t s u v s a〕に対して八重山諸方言の〔Φ u t s 1〕が対立しているようにみえる。しかし、石垣島方言の〔Φ u t s ɳ〕をあいだにはさんで、新城方言や波照間方言には宮古諸方言とおなじ系列の〔j a t s u f u t s 1〕〔j a t a Φ u t s ɳ〕があらわれている。これは宮古諸方言の語形が飛び火したのだろうか。

似た分布をしめす「甘薯」についてみると、竹富島方言の〔ɳ :〕や黒島方言の〔u ɳ〕は宮古諸方言の〔ɱ :〕に通ずるものである。石垣島方言などの〔a k k o N〕も宮良當壯1930『八重山語彙』によると語源的には「赤芋」に由来し、語構成的には〔a k a · u N〕であるとしている。もし、そうだとするなら、石垣方言の語形は、宮古諸方言にみられる語形〔ɱ :〕から派生した形ということになる。

まだ推測の域をでないが、つぎのようにいえそうである。「蓬」については宮古八重山方言群全体にヤイトグサ系の語形が分布していた。そこに沖縄方言のフツ系の語形が宮古、多良間を越えて、石垣方言を中心にした八重山諸方言にひろがっていったが、新城方言や波照間方言(白保方言も含む)ではヤイトグサ系の語形が保存された。「甘薯」についても宮古八重山方言群全体に「ウモ」系の語形がひろがっていたところに、八重山諸方言のなかに「赤・芋」系の語形が派生してひろがっていったが、宮古諸方言、多良間方言、竹富島方言、黒島方言ではそのまま「ウモ」系の語形が残ったとかがえられる。これは、「サトウキビ」の語形にみられる宮古諸方言のヲギ系と八重山諸方言のスツツァ系のようなまったく異なる語形の対立とはことなっている。

	顔	蓬(よもぎ)	甘薯
平良市下里	ミバナ m i p a n a	ヤツウグサ j a t s u v s a	んー ɱ :
平良市池間	ミバナ m i p a n a	ヤツウーサ j a t s u : s a	ンー N :
城辺町保良	ミバナ m i p a n a	ヤツウグサ j a t s u v s a	んー ɱ :
多良間村塩川	ミバナ m i p a n a	ヤツウウシャ j a t s u u ʃ a	んー ɱ :
多良間村仲筋	ミバナ m i p a n a	ヤツウウシャ j a t s u u ʃ a	んー ɱ :
多良間村水納	ミバナ m i p a n a	ヤトウフシャ j a t u f ʃ a	んー ɱ :
石垣市石垣	ウムティ u m u t i	フツ Φ u t s 1	アッコ a k k o N

竹富町竹富	ウムティ u m u t i	ブツ p u t s u	シー D :
竹富町小浜	ムティ m u t i	ブツ Φ u t s 1	アコーン a k o : N
竹富町黒島	ウムティ u m u t i	フチ Φ u t j i	ウン u ŋ
竹富町新城		ヤツフツ j a t s u f u t s 1	
竹富町波照間	ムチ m u t j i	ヤタフツ j a t a Φ u t s 1	アガン a ŋ g a N
与那国町祖納	ウムティー u m u t ' i :	フチー Φ u t ʒ i :	アガン a g a N

注) 多良間村仲筋、水納島の調査では「顔」の解答として [m i p a n a] の他に [u m u t i] という報告もあった。

注) 1999年10月2日に平良市でひらかれた学術シンポジウムの討論において、宮古方言でも「顔」を [u m u t i] ともいうとの教示を宮古郷土史研究会の佐渡山正吉さん(狩俣集落在住)からいただいた。普段は [m i p a n a] というが、稀に [u m u t i n u f f u m] (顔が黒ずむ) と言うことがあるとのことであった。複合語や慣用句のなかに古形が保存されることがあるが、この例もそれに類するものだろう。そうすると、[m i p a n a] は宮古諸方言で発生し、多良間方言にもつたわったということになる。そしてそれ以前には宮古、八重山の全域で [u m u t i] 系の語形があったものとおもわれる。

#### 4. 鯨は哺乳動物である —多良間方言は八重山方言である—

生物に限らず、ありとあらゆる分野で分類という行為は行われている。なかでも、生物は現在にいたるまで進化し続けているので、その進化の歴史を反映させた分類を行うべきだと考えられている。生物が進化の過程でどのように分化していったかという歴史的過程を系統という。分類においても系統を反映して、より近い過去の祖先を共有するものが、より低次の分類群としてまとまっていなければならない。

(村上哲朗1995「分子系統学による植物分類」)

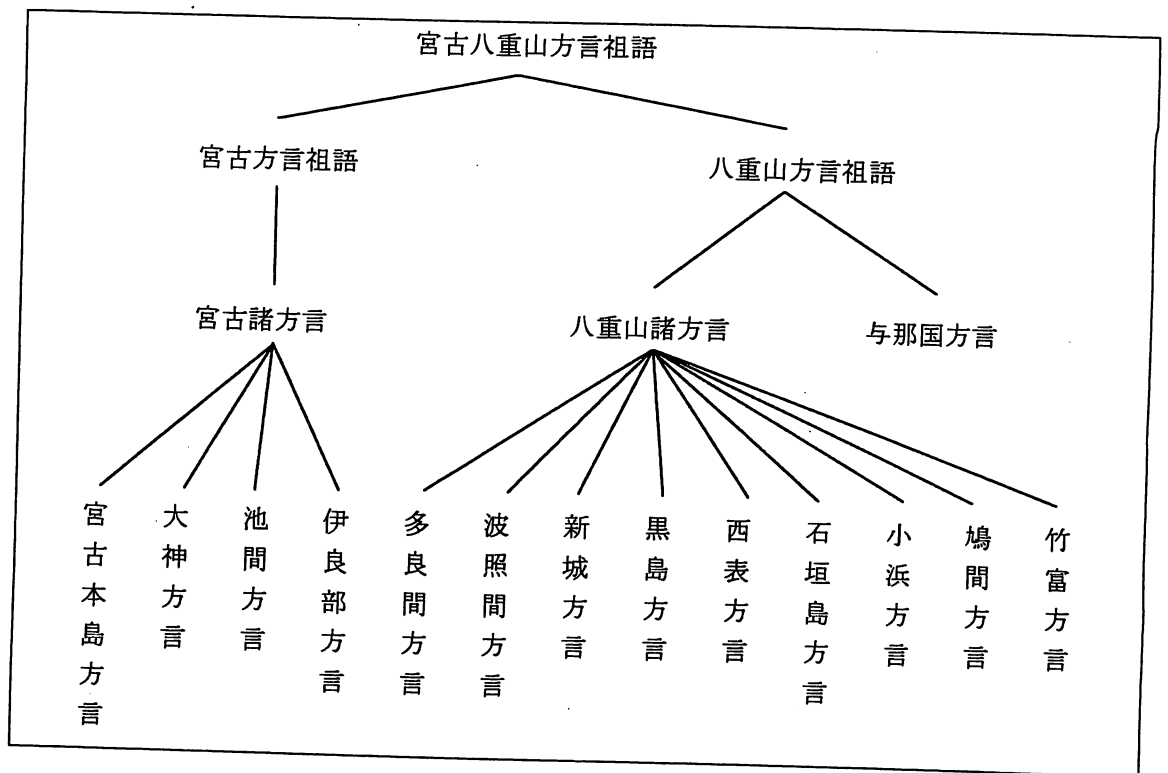
うへの引用の「生物」を「言語(あるいは方言)」に置き換え、「進化」を「変化」におきかえることが可能であるとするならば、多良間方言の下位区分も系統を反映しておこなわなければならない。多良間方言は現在にいたるまでどのような進化の過程を経、宮古諸方言と八重山諸方言が分岐する過程でどのようにふるまったのであろう。先に検討した多良間方言の特徴からつぎのようにまとめることができる。

多良間方言と八重山諸方言に共通する特徴は、おそらく、ふるい特徴で、両者が分岐する以前から共通にもっていたものである。その後、歴史が新しくなるほどに、多良間方言は、宮古諸方言との接触が頻繁になるなかで、宮古諸方言(とりわけ平良方言)からの影響を受け、宮古諸方言との共通の特徴をもつようになったものと思われる。多良間方言が宮古諸方言と共通で、八重山諸方言とは異なるようにみえる特徴、たとえば、発音の観点からみた閉音節構造の単語の豊かさなどは、多良間方言が宮古諸方言にちかい印象をあたえるが、こういった特徴はあたらしいものであろう。あるいは、「蓬」や「甘薯」の語形に

みられるようにかつて宮古八重山方言群全体に共通してみられたが、八重山諸方言（特に石垣方言）がその後に変化して、結果として宮古諸方言や多良間方言とことなるものになったと推定される。

外からの（発音を聞いた）印象によると、多良間方言は宮古諸方言のようにもみえるが、よりふるい特徴、すなわち、系統的な関係を重視すれば、多良間方言を八重山諸方言の下位方言に位置づけるべきであろう。宮古八重山方言群を下の表のように区分する案を示す。この区分はあくまでも暫定的なもので、宮古八重山方言群のすべての下位方言を詳細、かつ全面的に比較、検討するなかで、修正が必要になるだろう。

また、多良間方言をどう位置づけるかは、単に方言学上の問題だけではなく、考古学、歴史学、民俗学などの周辺諸科学の成果にまなびながら、より多面的に検討する必要があることはいうまでもない。



注) 与那国島方言の位置づけについても諸説あるが、ここでは仮の案を示した。その位置づけについても今後の課題である。

【参考文献】

高橋俊三1999「八重山のアイデンティティーを求めて」(『南島文化研究所所報』第44号)  
 上村幸雄1972「琉球方言入門」(『言語生活』第251号)  
 上村幸雄1992「琉球列島の言語(総説)」(『言語学大辞典』)  
 沖縄県教育委員会1978『多良間島の方言』

- 崎山理1963「琉球・宮古方言比較音韻論」(『国語学』54号)
- 高橋俊三1999「八重山のアイデンティティを求めて」(『南島文化研究所所報第44号』)
- 津波古敏子1982「多良間島塩川の方言における音韻の考察」(『琉球の言語と文化』)
- 津波古敏子1983「多良間島の方言」(『沖縄大百科』沖縄タイムス社)
- 長浜数子1978「多良間方言の音韻」(沖縄県教育委員会1978『多良間島の方言』所収)
- 中本正智1976『琉球方言音韻の研究』(法政大学出版局)
- 中本正智1984「琉球方言の区画」(『講座方言学10 沖縄・奄美大島の方言』)
- 中本正智1990『日本列島言語史の研究』
- 宮良當壯1930『八重山語彙』
- 村上哲朗1995「分子系統学による植物分類」(『植物の世界』)
- ウエイン・ローレンス1999「八重山方言の区画について」  
(第87回沖縄・八重山文化研究会発表レジュメ、1998年12月29日)
- 琉球大学沖縄文化研究所1968『宮古諸島学術調査研究報告 言語・文学編』